

1.0 prologue (人類の誕生)

1.1 ミミズ・ジャンプ

1.2 GUESS WHAT?

1.3 情報準備室にて

1.4 フライングジジイの怪

1.5 くだいなるいっぽ

1.6 AFURERU

【prologue (人類の誕生)】

神丸くーん

おーい 神丸くーん

かにまるくーん ふ

あにまるくーん ふふ

まるかみくーん ふ

まるがりくーん ふふふ

がりがりくーん うは

ガリガリ軍 と デブデブ軍 うははは

ガリガリ軍はひ弱 デブデブ軍はのろま お互い不健康が悩みだった

人類が生まれる遙か昔 ガリガリ軍とデブデブ軍の戦争は過酷を極めた。

やがてデブデブ軍大将デブ山デブ郎の「暑い、疲れる」の鶴の一声により、戦争は終わった。

そして、二つの軍は協定を結び、世界には平和が訪れた。

二つの軍はやがて仲良くなり、友達になり、恋人になり、結婚して、子供が生まれた。

それが今の人類である。デブデブとガリガリの子供たち

俺らの祖先はデブデブとガリガリ お互い不健康が悩みだった

あ神丸くんのお母さんおはようございますあの神丸くんはあそうですかわかりましたまっ
てます……

【ミミズ・ジャンプ】

2003年から2006年くらいまで毎朝 俺は神丸くんの家の前で少し待たされる

何か妄想するには短いけど待つには長過ぎる 日々その数分は俺にとってのストレス

かといっていよいよ呆れて迎えに行かなくなる ということもなく

3年以上そのルーティンを繰り返した俺も俺だ

いつの時代かの俺が 今日もこの日を この日にとっての今日を思い出している
そのときは大抵 道に転んでいる それでいて少し喜んでいる
時に下手なジャンプがきっかけ 時に勝手に自分でつまずいただけ
時に取っ組み合いの喧嘩のひとつひねり だけどその度に懐かしい何かで笑ってる

きっとそれは記憶を遡っている体と脳みその誤作動からなる相互作用
今日は火曜か土曜 平日か祝日 何ひとつ安定しない近頃のことには特に
なのに 振り返る日々の中に 食い込むような思い入れとは全く別のところに
無用の記憶がだらだらとアトランダム後煩雑に並んで置いていってあったりする

俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 歪な時計の
針の先にある 玄関のドアとチャイム の上に乗った自分の指

あの日に戻る 平凡なチャイム 幻想はだいぶクリアに広がる映像じゃない分
思考と視界 振り返っても悪いことは見ようとしない 理想の未来より改ざんする過去
俺と神丸くんっていつのいつ なんのなにで仲良くなったのかなんかよく覚えてないけど
おそらく友達と呼べる範囲の存在であったことは間違いないと思いたい

例えば団地の兄弟のような親密さはなくて均一な関係としての真実はそこにあった
街に住む妖怪みたいな上半身裸のジジイと一緒に遭遇したこともあった
だけどそれも今や居たかどうか不明で 親や地元の友達も暗黙のローカルルール
かもしれない もしかしたら君なら覚えてるかもしれない あの火の粉と あの日の事

君は出て来る 眠たげな顔は無愛想 特に会話もなくそろそろのんたに会いそう
合流すれば神丸くんはハイで 途端に会話の糸口・アイディア 「あいつ今日もヤバいね」
2人はサッカー部 顔色伺いあう ことなく 気まずい空間 俺だけにある浮遊感
校門はすぐそこ あと少しで着くのも やるせなくなる視界くぐもる世界は冬のように

俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 歪な時計の
針の先にある 玄関のドアとチャイム の上に乗った自分の指

【GUESS WHAT?】

「ねえ」「ん」「冗談思いついたから言っいい?」「いいよ」「神丸くんの家の前さあ、ミミズがいっぱい死んでんだけど、それって何でだと思っ?」「分からん」「何でだと思っ?」「分からん」「ちょっとは考えてみてよ」「分からんもん」「それはさあ、きつと神丸くんの家の匂いに誘われて出てきてんだよ」「どうゆうこと」「神丸くんの父ちゃん臭いんだろ」「うん臭い」「だからミミズは汚いから臭い匂いに引きつけられて出て来てんだよ、だけど日差しを浴びて一瞬で真っ黒焦げ」「あーね」「だから神丸くんの父ちゃんすげえよ自動ミミズ除去装置」「あーね」「わかる?」「わかるわかる」「だろ?うは」「でもさあ」「へ」「でもさあ」「なんだよのんたなんだよ」「わざわざ地面に潜ってるミミズ何で殺すん」「……」「確かに」「…それは」「神丸くんの父ちゃんなんでそんなことするん」「俺は知らんよ父ちゃんに聞いてよ」「そうだよ神丸くんの父ちゃんに聞けよ」「俺帰ったら聞いてみるわ」「うん聞いてって、ミミズ可哀想じゃないのかって、のんたが言っただって」「そうだね、言っどく」「でもさあ」「へ」「でもさあ」「のんたなんだよのんた」「でもそれってマサくんが勝手に言い出したことじゃないの?」「……」「そうなんだっけ」「そうだよ、だつて冗談思いついたって言っただじゃん」「だから冗談は冗談だろ別に意味とかねえよ適当だよ適当神丸くん家のところミミズいっぱい死んでるから思っただけだよいいだろ別に」「うん、いいよ」「いいけど」「いいよね」「うん」「いいけど」「だからさあ、父ちゃんに聞いてみてくれよ神丸くん、なんで父ちゃん臭いのかつて、うははは」「うん」「ね、聞いてみて」「…」「…」「う、はは、はは、」「…」「…」「…」「うん、僕毎朝思っんだよね、このまま僕たちが歩く分、校門がおんなじだけ遠くに僕たちの逆側に進んで行けば、ずっとずっと通学路で、一生3人で馬鹿な話できるのに」「え、俺も俺も」「でも勉強しなきゃだめじゃない」「そうだよね」「あとサッカーも」「そうだよね」「だからいいんだよこれくらいが丁度」「おお俺はそうは思わないな一、毎日ずっと、つていうか毎日つていうかそういう日にちとかも全部一本に繋がっちゃつて一本道、この道がそのまま人生みたいに見渡せて、ミミズが死んでたり、坂道で疲れたり、海とか見えて来たり、神丸くんと馬鹿な話して、先生の悪口とか好きな女子の話とかしながら歩ける限り歩き続けて疲れたら丁度都合よくそこにベンチがあつたりしてみんな腰かけて、そこでも1時間くらいもつと喋って、それでまた歩いてもつともつとくだらない話を俺はしたい、理科の授業で聞いた物が上から下に落ちるとか、宇宙がぐるぐる回ってるとか、歴史の授業で見た裸の猿みたいな人間とか、そういうのも全部見てみたい、全部この目で見てみた上でデタラメにして、みんなに教えたいって思っ」「そうなんだ、マサくんはそうなんだ」「神丸くんは?」「僕は」「でもさあ」「へ」「でもさあ」「なんだよのんたなんだよ」「宇宙つて回ってないよ」「へ」「宇宙つてぐるぐる回ってないよ」「回ってるだろ、俺たちが歩いてるんだから」「僕たちが歩いたり止まったりしても宇宙関係ないよ」「関係なくはないだろ、関係ないとかそういう言い方やめろよ、宇宙に関係ないものはないって先生言ったし、そもそも関係あるとかないとか他人ののんたが決めんなよ」「宇宙に関係ないものはないな

ら僕だって他人じゃないじゃない」「え！そうなの」「マサくんが言ったんだよ」「じゃあ
のんたは宇宙のなんなん」「身内かな」「宇宙の身内、のんたがそんなかっこいいわけないだろ」
「分かったよ、でも回ってないよ宇宙」「だからさあ」「じゃあ僕たちは宇宙の身内の、友達」
「え、神丸くん、え」「え」「え、今何か言った」「なんで？」「なんでっていうか何か言って
たから、友達？」「ああ、のんたがね、宇宙のね、身内なら、宇宙のね、身内のね、友達じ
ゃん、僕も、マサくんも」「え」「って言っただけ」「え」「自慢の友達じゃん」「え」「え、ど
うしたのマサくん」

【午後の情報準備室】

待ちわびていた昼休みも凧のように過ぎて…
何がしたかったのか思い出せないのが不思議で…
学校じゃ特に話す相手もないのは…
神丸くんものんたもサッカー一部でつるんでいて…

校舎の窓 4羽の鳩 もうあの後 解散したつきり
黒板に落書き 天使に悪魔に 遡る白亜紀 まるでRPG
無心で絵を描く モヤモヤがずっとある どこまでもいける駅前ロータリー並ぶバス
無心で絵を描く 今でも夢に見る 寒い夜 黒板の中に世界がある

俺がいて神丸くんもいる 本音で全部言い通してもいい
のんたは正直どっちでもいい そんなに好きじゃない特に容姿・うぜーノリ
だけどオリジナルあの頃のセオリー 思い出は不純物の色が濃く残る
見事黒っぽくそこに沈殿した 故郷から消えたチンチン電車

俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 歪な時計の
針の先にある 玄関のドアとチャイム の上に乗った自分の指

黒板も消し忘れ飯隠れて食って寝て カラスの鳴き声で起きる夏至の夕暮れ
誰もいない情報準備室の共同ソファに寝そべてサボるのが俺なりの情緒
だけどいつも不安で 掛け時計のひとつなく 気分だけで抜け駆けこの空間この日を繋ぐ
フェードアウトお日様 感覚らも伸びやか 誰も教えてくれなかったこのゲームの降り方

ZZZ…

寝過ごした顔に夕日の照らす…
誰も来ない忘れられた部屋は口数を減らす…
神丸くんとのは何も言わず帰ってしまった…
その日から気付けばそれが当たり前になった…

ブラインドの隙間 赤よりオレンジで 神丸君家経由せず直接俺ん家へ
一緒に行くのに帰るのは別 それからはどうにも気持ち汲み取ってもらえず
もしかしたらずっと このままの関係？ そもそも人間って どこからが無関係？
嫌な想像と理想像が交互に浮かんで 思い出せない今日も それぞれ別の空間で

俺がきつと毎朝 迎えに行くのやめたら とうとう俺たちの繋がりはなくなり
向こうはまるでずっとそうだったかのように振る舞うよ いつもより広い通学路
未知なる時間の道は寂しさと悔しさ 短くても日々の意味は些細な歌になる
向かい合うこともできず 俺はおちゃらけた しらけた朝は寒々とした空気流れた

俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 事実を述べる
俺はジャンプする この道の途中 ミミズを避ける 歪な時計の
針の先にある 玄関のドアとチャイム の上に乗った自分の指

我慢の限界で それでいつかの俺 2人を呼び出して 先生に言いつけて
「俺をのけ者にする こいつら2人クズ 俺の話無視する 性格は鬱屈」
…俺は泣いて 神丸くんは俺に謝った
のは引いていた でもそれが正解 先生は困っていた 時間全部止まっていた

促される仲直り 伸ばされた手を弾いて 俺がやったことってのは一種のテロらしいね
気まずさは加速 今日手をつないで帰れ 先生のナンセンスな提案に賛成する神丸くん
何が普通？ マニアック？ 確かでも不確かでも歌詞カードにはない話だ
3人で手をつないで帰ったあの日をもうきつと誰も覚えてない

【フライングジジイの怪】

とも今なら振り返られるけど、だけどあの時はもっと色んなことに必死だったんだと思う。
小さな町だった。何もなかったし、ミミズが沢山死んでいた。一人きりでいることは、何も
生み出さない。いつかどこか遠くに行けるなんて思ってもいなかった。この町の外の世界の
想像があのと時の自分にはできなかつた、ことと同時に、その内側に、何者かの体温が手の

ひらを通して入って来るような感覚も不快だった。その手をその時は一刻も早く振りほどきたかった。のは、きっと2人もそうで、俺の無尽蔵かと思われていたユーモアもすでに枯渇して、沈黙という気まずさを、夕方の静閑と捉え直すことが限界ついに一言も声を誰も発することも無く思考はまだ停止、そのままのんたん家の前の分かれ道、に、辿り着いてしまった。のんたは俺の左、神丸くんは俺の右にいて、のんたは俺から手を離してその手を俺たちに小さく振るじゃあねばいばいと口元だけが動いたように見えたけど、今思えば神丸君にだけ送った秘密の合図だったのかもしれない。根本的に俺はこいつのこういうところが全然ダメだった。神丸君と2人きりになった。俺は手を離さなかった。ここで一旦終わりにしても良かったけどそれくらいぐるぐる気まずさだけが合ったけどけど、それなのにも関わらず俺は、手を離さず、次は神丸くんの家まで、2人で手をつないで帰ろうとした。神丸くんはそれを振りほどくような男ではない、俺はそれを分かっていた。だからやっぱりああ、そうだな、俺はどっかで神丸くんの優しさと口数の少なさとかに甘えていたんだな、そう考えるとこれまでも、今までも、俺はいつも神丸くんと手をつないでいた。神丸くんは離さずいてくれた。それだけのことだった。特に何も起きない日常にとって、退屈に押し流される生活にとって、それだけのことが、何よりも本当のことを知らせる鐘の音だった。

フライングジジイというのが居る。俺たちがそう呼んでただけだけど。大人からすれば何々さんのところのお父さん、みたいに身元も分かっててその上で単純に触れちゃいけない、社会的に黙殺されている人ただただかもしれないが、不思議と大人からフライングジジイの話は注意喚起も含めて聞いたことが無かった。今思い返すとそれって妙な現象、俺たち小学生は学校で毎日のように誰かが目撃例を話して、今日は服着てた、今日はカマキリ持ってた、今日は遠くでぼい影を見た、今日は羊羹素手で持ってた、今日は握手した、今日は相づち打ってきた、今日は道に立ち止まってた、今日は挨拶してきたから無視したら追っかけて来た、今日はすぐ消えた、今日は金切り声出た、今日は毛布で覆い汗のシミ、今日は交番前で待ってた、今日は拍手した、今日は前向きぶってきた、今日は地味に足をやってた、など様々な報告がなされていたのにも関わらず、それを皆で同時に見たことはなくて、また語る人によって少しずつ違うイメージを持っているような感じもして、どこまでも曖昧な存在だった。だけど共有、されていることもあってそれは基本フライング、つまり両手を広げて町を飛んでいる、という目撃が最も多かったこと、またそこからフライングジジイと呼ばれるようになったこと。まあ実際は実際に飛んでいるわけではなく、ジャンプして地面から足が離れている間だけ手を鳥が羽ばたく、ようにパタパタと振る動作、をしていただけでその奇妙な挙動は、上半身裸にカーキ色の短パンにサンダルと簡単に反感買うビジュアルを軽く上回る危うさがあり、しかしそれでいて俺たちはその挙動に、少なからずえも言われぬ親しみをおぼえていたことも事実としてあった。いつかフライングジジイに本当にフライしてほしいと皆思っていたのだ。なぜか、ガチで。マジで意味分かんないけど。しかしそんな思いも、この日

を境に、その狂人の存在ごと、消えてなくなってしまう。その叫びは紛れもなく、のんたの声でそれが俺たちに届いて間もなく、鳩やら鳶やらが一斉に羽ばたく。一気に僕この世界に2人きりになったような怖さを感じて、それでものんたが気になって、どちらが引っ張るわけでもなく均等な力で、手だけで繋がったひとつの生き物みたいに、足やら膝やら振る腕やらそれぞれ体の機動を揃えて、声の方へ走った時の、住宅街の細い道に入って行くその情景が、眩しい、眩しくて目も開けられない西日の直射の中で見た、20年経ってもいまだ濁らない現実のひとつだ。だから俺たちは手をつないでいたんだとここまで思い返さないと思い出せないから、のんたに俺が感じていた煩わしさと彼の悲痛の叫び声はいつだってワンセットで何千と思い出される。それを、のんたごめんと今になって思えるくらいには時間が経った。故郷の鹿児島市、で起きた俺たちにとっての重大な事件は過去に仕舞えないまま、四条烏丸に移転したばかりのポケモンセンターキョウトの中で、まるでアニメやゲームのように、物語やゲーム、アニメ、そういった嘘が現実を越えるように、現実は嘘を越える。簡単にフライング。のんたは道に転がっていて、ズボンの一部が燃えて破れて、なんつーか多分、パンツが半分見えている状態。ジジイは手にチャッカマンを持ち、それをカチカチ鳴らしては確かにラジオ体操のような動きで、倒れ込むのんたに近づいていく。俺と神丸くんもさすがに怖くなって気付いたら手も離して、ジジイは俺たちに気付いてまたチャッカマンを鳴らして。鳴らす度にその先端に灯る小さな火。ジジイは鼻歌。誰もいない見つからない。いつからか辺り暗くなり音も無くなり遠くから耳鳴り、きーーん。曖昧な存在だったフライングジジイは今、曖昧な世界をここにもたらし今、そこで自分だけを何より具体的にしている。それは俺たちが繋ぎ合った手の汗ばむ密度やら、そういうものを信じる無謀な勇敢さでいつもなら、変えられるはずの空気ごと取り込んで、どこにも逃げ場のないようにして飲み込んで、いよいよある意味で羽ばたこうとしている。フライング、フライング、ユーモアも愛着もなくなった、子どもにだけ見られた亡霊じゃなく、ただのイカれた高齢者、そいつの本命は、ズボンまで燃やされた小学生、飛び散った火の粉、のんたは足腰に力が入らず震えるばかりで闇夜、常にその人にしか感じられないその痛みよ。それはじんじんと今にも、破裂するような温度を持って未来の、俺の元、にも届くほど。

【いだいなるいっぽ】

俺が蹴り上げたのは何のためだったか 繰り返すだけの日々が変わる羽があったら
誰が誰だかってみんな同じ表情 似つかわしい状況 また揺れるシーソー上
法則は一瞬で崩れる どんな友情も 重要度も 急用が入れば本職だって休業
週五で集合 おそらく無重力よりもっと自由で この地球で

本当に言うね あの時のいきなりの右足 ジジイの脇腹に刺さって喚き出し
俺は年寄り相手に加減なしでアゲインに励んだ 小さな光が見えた 出口ってより ENTER

それはこの友情の始まりで だけどこれまでの終わりで 誰よりも俺が待ちわびてた
垣間見えた勝利の瞬間 神丸くんは逃げた

全然大丈夫 それぞれの大事な物に従って生きていく毎日の毎シーン
ただ自分を愛し 叩き込む会心の一撃は 自分の人生のターニングポイント
だから俺はこれを 好きでもない友達を… いいや言ってみれば彼はただのクラスメイト
もつというとは友達の友達通学路以外じゃ付き合いのない向き合いもしない次会いもしない

ジジイは気絶して 俺ら抜き足差し足そのあと全力疾走すると街並はその場に
光だけを残して まるで新幹線の窓から見える繁華街の猥雑な明滅
坂の上ののんたん家 明日から俺問題児 だけど後悔一つなく 意味も無く手をつなぐ
驚いた表情ののんたが初めて俺の目を見てるような気がして思わず唾を飲んだ

2人でこの日のことを内緒にした のんたのお母さんに挨拶を最初にした
あとは約束ごと 気まずさを代償にした神丸くんを責めないこと 後日のんたが
お母さんに喋っちゃって警察に通報それ以来フライングジジイは話題に出すことも禁止され
今では全部俺が作った空想のようにも思えるほど もう誰も知らないことだろう

【AFURERU】

次の日神丸くんは姿を表さなかった、神丸くんのお母さんも先に行っててごめんねとだけだ
った。俺たちなんにも怒ってないのに。むしろ神丸君がいなかったら俺はのんたの叫び声だ
け聞いてても助けに行くようなことできなかつたと思う。まるで別の生き物のように自分の
意志とは無関係に動いた体の在処はきっと神丸君の心の中だったんだと思う。俺は体を貸し
ただけ。あの日から時間が経つにつれ、そうとしか思えなくなっていった。のんたとの2人
きりの登校は最初こそキラキラしていたけど結局じわじわと白々しくなり曇天、100点中4
点、退屈を越えて苦痛。それで結局1人で行く。数えきれないテイク。それでも神丸君家
には毎朝毎朝迎えに行った。自分でもしつこいだろうなと思い始めた頃、先に行っててごめん
ねも聞き飽きた頃、あえて迎えに行くのをパタリとやめた。探してくれ勝手に代替りの誰か。
そうするともう、俺はあの時のまま。うんにゃ、もっと酷いかな。1人で行って1人で帰る。
それだけに戻ってそれがずっと続いた。部活で2人は楽しそうにしている様子からは伺
えなかった。あの火の粉とあの日の事も。それを情報準備室のブラインドの隙間から見てる。
ただ見てる。それだけ。それで20年経って、四条烏丸のポケモンセンターキョウトで、ま
だ俺は神丸くんの玄関の前にいる。気が向いたら出て来てくれよ、少しでもいい顔見せてく
れよ、また眠たげに、覗き込んでくれよ、と思う。午後の京都の酷暑、が思い出させた、孤
独の僕の記憶を、今度は君が迎えに来てくれないかな。